わたしとあなたの
露出交換日記
添牙 いろは

# わたしとあなたの
# 露出交換日記

添牙いろは

これから少し、俺の懺悔を聞いて欲しい。男の性癖になど興味はないだろうが、俺と彼女との話を始める前に、どうしても話しておく必要があるのだ。

俺は元々外で裸になる趣味などなかった。脱ぐことに傾倒しているのではなく、着ないことによる結果に過ぎなかった。つまり、服を着ていない状態こそが最も気が楽だった。それだけのことだ。これは、十年以上も前の子供の頃からの嗜好なので、おそらくこれからも変わることはないだろう。

そのようなわけで、普段着はできるだけゆったりしたものを選んでいたし、冬でも靴下等は履かず、裸足で過ごすような少年だった。親に咎められるため、自室の外ではそれなりに来ていたが、部屋の中では何も着ておらず、寒い季節には素肌に半纏を羽織る程度だった。

俺は、ずっとそうして過ごしてきた。俺は、そのように出来ているらしい。

そんな自分にとって、〇学校の制服は少なからず窮屈だった。シャツのボタンはきっちり留めて、詰め襟は閉じ、下着の色まで決まっていた。規則ならば、と従ってはいたが、それは、俺の密かな願望を増幅させていってしまった。

『自然な姿で授業を受けてみたい』

さすがに、これを実行に移すことはなかった。その代わりとして、俺は放課後、誰もいない教室で制服を脱いでみることにしたのだ。胸を締め付けるようなYシャ

ツも、肩凝りの温床になりそうな詰め襟も、腰にのし掛かるスラックスから足の指を束ねる靴下まで、全て脱ぎ去って、自分の席に座って黒板に相対する。木製の座面に直に尻を着けると、少しひんやりしたが、それ以上に股間は熱を持って硬化していった。

そして、高鳴る胸の鼓動は、俺に更なる欲望を突きつける。

『このまま校舎内を歩いてみたい』

事もあろうに俺は滾(たぎ)る股間に背中を押されて、教室からそっと外に出てしまったのだ。足の裏の安全面を考えて上履きだけは履いていたが、それ以外は制服どころか一糸すら纏わぬ背徳的な姿で。

熱くなったところに導かれるままに手を添えて、歩調に合わせて前後させる。この初めての露出行為に、俺はあっという間に込み上げてくるものを感じ、慌ててトイレに駆け込んだ。そして、本来尿を排泄する場所に向かって、異なるものを射出していたのだった。

我に返ると、己の無謀さ加減に恐れ慄き、慌てて教室に戻った。しかし、この胸にその快感と興奮は、しっかりと刻み込まれてしまったのだった。

それからというもの、人が居ない場所、人が居ない時間帯を見つけては、このよ

うな行為を繰り返すようになってしまった。自分でも危うい趣味だと解っているが、それでもこの衝動を抑えることができなかった。

大学を卒業すると、俺は会社勤めではなく、家業を継ぐことになった。もしスーツ着用の企業に就職していたら、中学生の頃と同じような願望を、社会人という立場にも関わらず抱いてしまったことだろう。そこは運が良かった、というべきか。服を着るのは、人と会う時だけで良いので、そういう意味では、学生時代より過ごしやすくなった。

そう、服を着るのは、人と会う時だけなのだ。そこが住宅街の路上であっても。

自宅から十五分ほど離れた住宅街の一角に、前々から目をつけていた小さな公園があった。外周にしっかりと生い茂った樹木によって中の様子は見え難く、入口も一つしかなく、人の流れも限定されている。園内にも緑が多く、咄嗟の事態に隠れる場所にも不自由しなさそうだ。俺は、この公園を一目見た時から、夜になったら全裸で訪れたい、と考えていた。

しかし、それは難しかった。

ここは別の場所だが、少し離れたところに多くの男女の逢引に利用される海浜公園があった。しかし、有名な場所だけに、治安の問題で深夜の時間帯になると警備員が巡回するようになるのだ。大人しくホテルにでも行けば良いものを、とも思

うが彼らの気持ちも解らなくもない。開放的なムードに、より浸りたかったのかもしれない。

こうして、海浜公園から追い出された彼らは、中断された続きをこの名も無き小さな公園で再開してしまうようなのだ。俺は元よりこの趣味を他人に開かすつもりもないが、何よりも、二人組の愛に溢れたこの公園に、俺のような独り者は場違いもいいところだ。

それで、半ば諦めていたが……待てば光明はあるものだ。いつしか、この小さな公園も、警備員の巡回コースに加わったのである。皆があまりに堂々と愛しすぎ、近隣の住民に見つかってしまったのだろうか。

ともかく、お陰で海浜公園で愛を営んでいたカップルにとって、このような何もない公園に足を運ぶメリットはなくなった。彼らが消えれば、巡回員がわざわざこんなところまで足を運ぶ必要性もなく、元の経路へと戻っていく。

そして、誰もいなくなった。

それを確認するため、俺は下着も着けずに上下にシャツとズボンの一枚ずつの服装で、この公園に訪れた。最初感じたとおり、そこは開放的ながらも安全な雰囲気に包まれており、絶好の露出スポットだといえた。俺は、すぐさま薄い衣服を脱ぎ捨てて、月明かりの下で優雅に自慰に興じるのだった。

公園としては狭いながらも俺一人のオナニーには広すぎる公園の真ん中で、何にも憚られることなく、中央の見晴らしの良いベンチで今まで溜め込んでいたものを解き放つように何度もイッてしまった。やはり、ここは俺が思っていたとおり、素晴らしい露出場所だった。

それも二度繰り返すと、三度目は更なる刺激を欲するようになっていた。この辺りにそもそも人通りが無いのをいいことに、少し離れた物陰に着てきた服を隠して、全裸のまま公園を入退場してみたくなったのだ。周囲は寝静まっていて、人が動く気配もない。その小道を、俺はモノをぶら下げながら歩いて行く。

そして、目的地の公園に、そのままの姿で足を踏み入れていくのだ。その清々しさに高揚を止められない俺は、茂みの陰ではなく、わざと目立つ街灯の下で、己の愚息を楽しませてしまった。手元がはっきりと見える場所での手淫。射精の様子すらありありと映し出される。恍惚と危機感が入り混じる不思議な感覚に俺はのめり込みつつあった。

その次は、一箇所に留まらず、広くもない園内を一周してみることにした。この時間に奥まで足を踏み入れたことはなかったが、そこは薄暗く、外から覗かれても気づかれないだろう。一方、園の中央は街灯の明かりによって照らされ、こちらからはその様子がしっかりと見える。明と暗のコントラストにより、この奥の暗がり

なら少し大胆なことをしても平気かもしれない、と不敵な期待に胸を躍らされるのだった。

しかし、三度目の来訪時に自体は急転する。

それまで通り近所の駐車場の車体の裏に衣服を置いて、公園まで向かっていた。その日は早くも気分が高揚していて、路上だというのに、自分のモノに触れずにはいられなかった。一方で、人目のつきにくい公園どころか、こんな道端で本能に立ち返るという人の道から外れた行為に、俺の性的興奮は更に高まっていってしまった。

興奮の中で俺は、射精するポイントを予め決めることにした。最初は公園の入口で抜き、その後、奥の暗がりを歩きながら、最後はベンチにでも腰を掛けながら三度目を向かえるつもりでいた。

しかし、その計画は一度目の時点で頓挫する。

「えっ!?」

この声は、俺が発したものではない。よりにもよって、最も見つかってはならない相手、若い女性のものが、俺のすぐ背後から聞こえてきたのだ。

正直、油断していたところはある。丁度最初の射精が迫っていて、そこに意識が

注がれてしまっていた。しかし、こんな近くにまで他者が迫っていたことに気付かないとは、我ながら尋常ではなかった。

露出行為は中止して、俺はその場から走って逃げ去るべきだったのかもしれない。後ろから声を掛けられただけなので、顔は見られていないのだし。

それなのに、俺は声に釣られて、つい振り向いてしまったのだ。そしてその時、何故自分がこんなに詰め寄られるまで気づかなかったのか、その理由を知ることとなる。

彼女は、裸足だったのだ。硬い靴底を鳴らしながら近づいてくれば、静まり返った深夜帯で気付かないはずがないのだから。

それよりも先に、俺はもっと気付かねばならないことがあった。普通の女性であれば、遠くから俺の姿を見つけた時点で道を変えるか、その場で大声を上げるだろう。それが、わざわざ近づいてから小声を上げるとは尋常ではない。こんな危険極まりない男に対して、無警戒に近づいてくる事自体があり得ないことなのだ。

それがあり得てしまったのは……彼女自身もまた、無警戒な姿だったからだ。

その脚に何も履いていないだけでなく、腰にも何も身に纏っておらず、その両脚の付け根に茂る柔らかそうな陰毛が緩やかな丘の麓にうっすらと茂る様子まで、俺の目の前にさまざまと曝け出されていた。

それよりも俺の目を釘付けにしたのは、彼女の豊かな両胸だった。一つ一つが片手で余る程の大きさを誇示しながらも、乳輪はぷっくりと膨らんだ乳首の周りだけをほんのりと色付けている。

触れてみたい、という本能の爆発に対して、触れてはならない、という理性が全力でブレーキを掛ける。自分の中の二つの感情の爆発に頭が追いつかず、俺は瞬き一つすることができなくなっていた。

「わっ、わたしは見てっ、見てるだけですのでっ、そのまま続きをお願いしますっ」

彼女の声に、第三のアクセルが踏み込まれた。触れるか触れないかは置いといて、ともかく今はこの美しい肢体（からだ）を拝みながら、こみ上げてくる自分の欲望を満たしてしまおう。これに対するブレーキはなかった。彼女の許可を得た上で、自分自身で楽しむのであれば、それを抑える理由などなかったのだから。

ここが公園に入る前の公道だということは解っている。道行く人が通りがかっただけで我々の行為は認知されてしまうことも。

それでも、目の前の彼女が、俺の身体を見ている。俺の握り拳の動きを追いながら、自分の胸に左手を埋め、右手の指を割れ目に挿し込んで、とても嬉しそうな顔を上気させている。そんな彼女に「やめておきましょう」どころか「場所を変えま

しょう」とすらも言えるはずもない。俺自身も我慢できない。
彼女の全身は快楽に蝕まれていて、虚ろな瞳は俺の方を見ているのかも怪しい。立っているのもやっとのようで、膝をガクガクと震わせている。それでも指の動きを止めることはない。
「あっ、あっ、はっ、にゃあぁ❤」
彼女は高まるほどに、吐息の中に嬌声が入り混じってくる。そして、その甘さが俺の股間も高めていく。
これは……もう――――っ！

びゅっ……びゅるっ……びゅるっ……

既に本日二回目ではあったが、新たな性的興奮を受けて、一回目にも劣らない勢いの精液が彼女に向かって迸った。
「あ……っ」
彼女の小さな声に、掛かってしまったのかと気を揉んだが、届く気配すらない飛距離だったので、それも杞憂だったと安心した。
彼女がまゆを釣り上げたのは、全く別の理由だった。

「イク時はちゃんとイッてください！」
……何だって？　イク時はイケ？　彼女の言葉は全くの支離滅裂だった。
が、少しして気付く。イク時は言え、ということか。彼女は俺と共にイクために我慢していたのかもしれない。
「あ、ああ、それはすまなかった」
こんなことで謝るのも何だか照れるが、彼女としては重要な事だったのだろう。次の機会があるなら、きちんと申告しようと思った。
そんなことを考えていたので、
「次、ザーメンがいっぱいに溜まるのは何日後になりますか？」
まるで、次の約束を取り付けるような彼女の物言いに、少なからずドキリとした。しかし期待はせず、淡白に質問内容にだけ答えるよう、できる限りの平静を装った。
「三日……くらいだろうな」
一般的にはそんなものだろう。意識したことはないが。
「それでは、三日後のこの時間に、この公園までいらしていただけますか？　その間、オナニーなどはなさらないでくださいね」
再びここでの羞恥を約束させられた上、禁欲まで命じられるとは！
しかし、彼女の胸の前では何を言い返すことも出来ず……

「ん、む……判った……」

いつもなら三度はイケる愚息も、二度目の激しさに残りの一回分も射精(だ)し切ってしまったようだ。これでは、大人しく首を縦に振るしかない。

承諾の意志を見せると、俺は踵を返し、服の隠し場所へと戻ることにした。彼女とのひと時を思い出すと、それだけで悶々としてしまい、萎えた自分の身体を今すぐに叱咤激励したくなってしまうのだった。先ほど禁じられたばかりだというのに。

空色書房
Sleeping under the sky

# 裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも裸になりたがる
残念な性癖を持つ女子高生
まいたけレイナが
恋して妄想して大暴走する物語です。

健全な男子高校生が裸族女子と出逢って翻弄される物語です。

左記の物語の裸族女子視点の物語です。事あるごとにエロいです。

そして彼らは一線を超える……!? 2014年夏頃公開予定の官能小説です。

詳しくはWebで
http://soekiba.net/ninja/02/

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで
http://soekiba.net/seeckt/01/

空色書房
Sleeping under the sky

# ゲーム会社でつくったゲーム

高校生プログラマ輝山工祐が
コンピュータゲーム部が抱える
問題を通じて
ゲームの本質に気づいていく……
ゲームに拘りのある方には
是非読んで頂きたい一冊です。

お色気要素満載の別バージョンも
あります。ゲームに関する流れは
全く同じですので、
そういうのに抵抗がない方、
むしろ好きな方は、
こちらも合わせてご覧下さい。

**詳しくはWebで**
**http://soekiba.net/game/**

空色書房

Sleeping under the sky